
日の午前十時に一升瓶持って正門に集合お願いします！」というメールを送ってくる後輩の女

菜緒

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「明日の午前十時に一升瓶持つて正門に集合お願いします！」というメールを送ってくる後輩の女の子

【Nコード】

N2053R

【作者名】

菜緒

【あらすじ】

後輩の富永佑里はバカでエロくてピーキーでアル中でヒステリーな女の子である。そんな彼女に平日の昼間から酒持参の飲み会に誘われた俺の運命はいつたくなるのだろうか。いつもは殴られるだけだが、今回は時期が時期なので最悪殺されるかもしれない。でも、それでも俺の中に行かないという選択肢はない。なぜなら彼女をわかってやれる奴は今のところ俺しかないから。しかし、そうはいっても……面倒くせえな。

高校生までほどピュアではないけど社会人ほど擦れてはない。そんな大学生の無気力な先輩とヤンデレの後輩が出会ったとき、複雑な恋が始まる???かもしれない……

前編

日曜日の夜、お笑い番組を見ながらパソコンで卒業論文を書いていると、サークルの後輩の女の子から一通のメールが届いた。俺は嫌な予感がしつつも手元にあった携帯を開きメールを確認すると、案の定そこにはこんなことが書かれていた。

——明日の午前十時に一升瓶持って正門に集合お願いします！

「アイツ……やっぱり真正正銘のバカだ……」

俺が彼女に抱く感情はいつも変わらない。そういう意味では、彼女——富永佑里は、期待を裏切らない人間だった。

「やっぱり本気でいるんだな……」

朝の10時。原付を駐輪場に置いて大学の正門近くまで歩いていくと、そこには明らかに怪しい人物が立っていた。薄いクリーム色の胸元にフリルがついた可愛いシャツと、緑のカーゴパンツを穿いた黒髪ショートカットの女の子は、『おれの酒』と書かれた日

本酒の一升瓶を大事そうに両手で抱えながら辺りをキョロキョロと見回していた。

「うわぁ……マジであんな女には近付きたくねえ……」

すぐにUターンして東門から敷地内に入ろうと考えた。しかし、運の悪いことに現在は一コマ目の授業中なので道を歩いている人がほとんどいなかった。キョロキョロ辺りを見回していた女の子はすぐに数十メートル離れた場所に立ち尽くしていた俺に気づいて、駆け足で近寄ってきた。

「先輩マジ遅いですよ。可愛い女の子をあんなところに待たせるなんて信じられないです」

俺はお前が信じられんわ、と心の中で思ったが、そういうことを言ってもこの女の子には意味がないということはこの三年間で俺は身に染みてわかっていた。そこで俺は無駄口を叩く代わりに「他の奴は？」と日本酒を抱えた女の子に尋ねてみるが、

「え、何言ってるんですか？ 集合かけたのは先輩だけです。だって私、メーリスも一斉送信もしてなかったじゃないですか？」

最悪な答えが返ってくるだけだった。

「それに、こんなこと計画してもどうせ来てくれるのは先輩だけですからね」

「いや、そういう迷惑な信頼感とかいらんから。というか、それじゃあもし俺が来なかったらどうしてたんだ？」

「たぶん一生待ってたんじゃないですか？」

「……」

笑いながらさらつと言うが、コイツが言うつと冗談に聞こえないのが恐ろしかった。富永佑里——テニスサークルの一年後輩の女の子——は、真正正銘のバカであつたけれど、とにかく自分を曲げない女の子だつた。それでいて酷くマイペースで、だから顔はすこぶる可愛くスタイルも抜群にいいのに、なかなか男にはモテなかつた。というか、男に限らずあまり他の人間に理解されなかつた。もちろん外見は良く、性格も明るいので友達が多かつた。でも、本当の意味で彼女のことを理解している人間は同じ学科にいる女友達数人とサークルにいる数人しかいない……らしい。

「でも、そんな心配しなくても先輩は絶対に来てくれますしね」

「……まあ、図書館で卒論の続きやろうと思つてたからな」

「ふふふ、そうやっていちいち理由を付けながらも私の言うことを聞いてくれる先輩が私、大好きです……でも、一升瓶持参としつかりと書いてあつたのに、そんな薄っぺらな『PCしかは入っていません』的な鞆しか持つてきていないのは大幅減点ですね」

「別に俺はお前に好かれるために行動しているわけじゃないし、本当に卒論をやるつもりだつたんだ。それに、俺日本酒ってあんまり好きじゃないし」

そう言つて俺は佑里に背中を向けて、駐輪場に戻ることにした。何も言わずに歩き出した俺に対して、彼女も何も言わずにただ黙つて付いてきた。そして俺は駐輪場に止めてある収納スペースの広さだけが自慢の原付に鍵を差して、座席を上げる。すると、俺の肩越しからその光景を覗いていた佑里が、

「いやー大槻先輩。さっきは生意気言つてすみませんでした。やっぱり先輩は私の想像通りの人でした」

今更おだてても遅い。俺は収納スペースにパソコンが入った鞆を入れる代わりに、袋に入った缶ビール十二本と芋焼酎と麦焼酎それぞれ一本ずつを取り出した。

「で、どこで飲む？」

俺はメールを受け取った当初、大学近くのサークルの奴の家でお酒を飲むんだと思ってた。しかし、集合場所に行ってみれば、そもそもこの思い付きみたいな飲み会は俺と佑里の二人だけで開催するということではないか。ということは、その事実が判明した時点で必然的にどちらかの家で飲むと考えるのが世間一般の人の思考回路であろう。ちなみに、俺は大学から五キロほど離れたところにある実家から通っている。つまり、そういう諸々のことを勘案すれば、当然大学からも近い佑里の下宿先のアパートで飲むという答えを導き出すことができる。できる……はずだったのだが、

「なぜ、大学の中庭で飲まなきゃいけないんだ？」

「へへへ、実は授業が終わってこの前を通る度に思ってたんですよね」

「何を？」

「ここで昼真からお酒飲んだらおいしだろうなって。しかもみんなが授業受けているときに」

バカ丸出しというレベルを遥かに超えて、もはや思考回路が人間

のそれ女の子のそれとは思えなかった。どうしたら大学内を普通に歩いていてそんな発想が浮かぶのだろうか。

「チクシヨウ。だから二人で飲むのに集合場所が大学の前だったのか……」

「いやーやつぱり最初は日本酒よりもビールですよ」

「佑里、お前もう少し人の話を聞くことと人と話すことを練習したほうがいいぞ？」

「え？　なんですか？」

「……スーパードライ飲んだら怒るからな」

「了解っす！！」

芝生の上に何も敷かずにそのまま胡坐をかいて向かい合うように座った俺たちは、とりあえず俺が買ってきたビールを開けて乾杯した。そのとき俺はただスーパードライの缶を前に出ただけなのだが、佑里が大声で「かーんぱーい！！」と言うので、周りの道を歩いていた授業に遅れそうな生徒や大学職員の人達が何事かという目で俺たちに注目した。視線が痛かった。クソッ、なぜ今まで平穩に大学生活を送ってきた俺が卒業を控えた十月の始めにこんな拷問みたいな目にあわなければならぬんだ。これで職員に注意されて、もしも卒業が取り消されるようなことがあったらどうするつもりなんだ、この女は。

「二本目貰いまーす！！」

「サークルの飲み会じゃねえんだからプレミアムモルツを一气飲みするのはやめろや！！」

今度は俺の大声で周りの視線が集まった。不覚を取った俺は恥ずかしさを紛らわせるために、500mlのスーパードライを一気に飲み干した。もちろんそんなことをすればゲップが出るのだが、他

の人の前ならまだしも佑里の前でそんな気遣いをする必要も義理もない。ということで、盛大にゲップをした俺はそのまま缶を握り潰して持ってきた袋の中に入れた。

「先輩先輩、私の缶も」

「自分で入れろや」

「えー、そっちに袋があるんだからいいじゃないですか。それに先輩のリングもぶっ潰せるその握力で、紙くずのように缶をグシャツてやるのは見てると楽しいんですけど」

「悪い、佑里。そのリングを潰せる云々は沙織ちゃんの嘘なんだ」

「え、マジっすか！？　じゃあ居酒屋で飲んだとき隣で騒いでるグループを黙らせるためにビール瓶を手刀で割ったっていうのも」

「それは本当だ」

「ですよ。あそこの居酒屋ウチのサークル未だに出入り禁止ですもん」

笑いながら二本目も飲み干した佑里は、一本目の缶と一緒に俺に渡してきた。仕方なく俺はそれを受け取り缶を潰して袋に入れてやった。

「それにしてももう十月ですけど暖かいですね」

「お前そろそろ就活じゃん、どうすんの？」

「まだなーんにも決めてません。ていうか、ぶっちゃけ働きたくないです」

「みんなぶっちゃければ働きたくないんだよ、わがまま言うな」

「先輩は……食品関係でしたっけ？」

「そうだよ、まだ配属先とかは決まってるけどないけどな」

二本目のスーパードライを飲み終えた俺は缶を握り潰し袋の中に入れた。そして、今度は……と、考えていると、佑里が自分の目の

前に置いてあった紺色のプレミアムモルツの缶を手にとって俺に渡してくれた。

「サンキュ」

「どういたしまして」

プレミアムモルツを開けて一口飲むと、今度は佑里が三本目のプレミアムモルツを飲み終えたので、俺は手を出して空き缶を受け取り、そして右膝の辺りにあった開いていないスーパードライを渡した。

「先輩、好きなのがいいんですか？」

「飲みたいんだろ？」

「よくそういうのわかりますね」

「わざとらしくモルツ渡しておいて『よくわかりますね』じゃないだろ。もういいよ、好きなの飲めよ」

「わーい、だから先輩と飲むの好きなんですよ」

まるで子どものように喜んでスーパードライを飲み始める佑里。そんな無邪気な姿を見ながら、しかし、俺はあえて言わなかった。

俺も次はプレミアムモルツを飲もうとしていたこと。

それを感じたのか、迷うことなくそれを勧めてきたこと。

よくわかったな、とは思った。

でも、

でも、それもやっぱりいつものことだったから、俺は何も言わず

プレミアムモルツ——通称プレモル——を喉の奥に流し込んだ。
それからもつまみも何もない、ただ酒を飲む文字通りの飲み会は続いた。俺も佑里も共に五本ずつ500mlのビールを飲み、今は二人とも最後のビールを飲んでいた。

「先輩酔ってますか？」

「さあ、自分ではあんまり酔ってる気はしなけどな」

腕を巻くつて時計で時間を確認すると時刻は十一時半。どうやら飲み始めてから一時間ほど経ったらしい。一時間でビール二リットル以上は、つまみがないとしても若干いつもよりピッチが早い。そう考えると酔いが回ってきてても不思議じゃなかった。

「あ、先輩の時計カッコいいじゃないですか。ちょっと見せてくださいよ」

「ん、お前これ見たことなかったっけ？」

俺が腕から時計を外して佑里に時計を渡すと、佑里はビール片手にうんうんと頷きながらその時計を見ていた。俺は、あの時計がそんなにいいか、と思いながらその様子を見ていたが、不意に佑里は腕を振りかぶり、

「えーい」

その時計を投げた。投げた。冗談とかそういう感じではなく、思いつきりだ。時計は芝生が生えているところを大きく越えて、赤とオレンジのレンガが敷き詰めてある道に落ちて……跳ねた。

「見てください、先輩。メッチャ飛びましたよ？」

「……」

二十歳のときに三万で買ったお気に入りの時計だった。おそらく今から拾いに行っても壊れてしまっているだろう。だから俺はそんな無駄なことはせずに、この後どうするのか、どうするべきなのかを考えた。

「佑里」

「何ですか、先輩？」

悪びれもせず、楽しそうに笑う佑里。

そんな彼女を見て、俺は大きく吸い込んだ。

「ごめんな」

怒ろうとも思っただけで、俺は素直に謝ることにした。

「飲んでる途中で時計見て、時間気にしてごめんな。今度からは気をつけるわ」

「え？ 私は全然気にしてないですよ？ でも先輩がそう言うのなら、今度からは気をつけてくださいね」

そう言った佑里は持っていた缶を突き出して、俺もまたその缶に自分の缶をぶつけて再度乾杯をした。そして、文字通り杯を乾かした佑里は、空になった缶を自分で握り潰し、「周りに人が増えてきたから、次行きましょう、次」と言っただけで自分が持ってきた『おれの

酒』を掴んで立ち上がった。確かに周りを見渡せば、早めに授業を終えた生徒たちが続々と校舎から出てくるのが俺の座っている位置からでも見えた。

俺は心の中でやれやれと思いながら、自分が持っているビールを飲み干した。さすがに六本目なので、少し気持ちが悪かったけれど、飲み終えた缶を潰した俺は片付けをして立ち上がり、近くにあったゴミ箱に今まで飲んだビールの缶を捨てにいった。

「というか、なんで先輩の俺が片付けしてんだ？」

そんな当然浮かぶべき、感じるべきことを少し考えて、しかし、佑里がまた変な行動を起こしても困るので、ゴミを捨てた俺はさっきいたところまで小走りで戻ろうとした。すると酔いの所為か、途中で足がもつれた俺はそのまま無残に芝生の上でこけてしまい、気がつくとな頭上では佑里が腹を抱えて大爆笑していた。

「……お前、絶対に俺のこと尊敬してないだろ」

「あははは、まあ確かに尊敬はしてないですよ。でも、さっきも言ったように信頼はしてますから」

すごく、

誰よりも。

そう言っただけで佑里は空いている方の手を俺に差し出した。

「……だからそういう迷惑な信頼感はいらねえって言ってんだろ」

「恥ずかしがる先輩は相変わらずかわええのー」

「ふん、からかうならもう行かねえよ」

「はいはい、勘ねないでください。とりあえずそこから立ち上がっ

てくださいよ」

差し出された白くて小さい手。俺はそれを握って立ち上がり、服についてしまった芝生を素早く手で払った。そして改めてさっきの場所まで行き、置きっぱなしになっていた焼酎が入ったビニール袋を拾い上げた。その間、佑里は一升瓶を手を持ちながらずっと俺のを見てニヤニヤと笑っていた。まったく、誰の所為でこんな目にあってると思ってるんだ。

「佑里、さつさと次行くぞ」

居心地の悪くなった俺が少し機嫌悪そうにそう言うと、佑里は逆にすこぶる機嫌の良さそうな声で「はい」と返事をして俺に駆け寄ってきた。しかも寄るだけでは飽き足らず、空いている右手で俺の左手にしがみ付いてきた。いつも冷静で、どんなときもクールで、いかなるときもチキンであると自負をしている俺でも、さすがにこれには驚かずにはいられなかった。佑里はバカでピーキーであるが、その顔とスタイルの良さは誰もが認める女の子なのだ。だから後ろから左手に抱きつかれた俺の肘には、佑里の豊満な胸がこれでもかというくらい押し付けられていた。

「ワザとだろ？」

「嬉しいでしょ？」

「嬉しいかねーよ」

「そうですか。じゃあ罰として次の場所まではこうやってイチヤイチヤしながら行くことにしまーす」

何が罰で、そもそもどんな罪を犯したのか俺にはまったくわからなかった。しかし、この状態の佑里と言い合いをするのはあらゆる意味で時間と労力の無駄なので、俺は黙って引きずられることにし

た。中庭を出るとき同じ学科の女の子やサークルの後輩に出会ったが、彼女たちは何も言わなかった……否、何も言ってくれなかった。きっと俺の悲壮感漂う顔を見て言葉が出なかったのだろう。それはわかった。ただ、お願いだからこのことを昼飯を食べながら話したり、家に帰ってブログなどでアップしたりすることだけはやめてほしい。俺はこれ以上この大学に不名誉な伝説（ほとんど酒を飲んだ佑里の所為）は残したくはないし、なにより佑里と付き合っているという誤解だけはされたくないかった。

別に俺に彼女がいるわけじゃない。

俺が佑里のことを嫌いと言っわけでもない。

ただ、佑里自身がそういう関係を望んでいないと、

そのことだけははっきりとわかっていたから。

前編（後書き）

感想等ありましたらいつでもどうぞ

中編

「海ですよ、海！　なんかテンション上がっちゃいますね！」

残念ながらそれはお前だけだ、と言う言葉を根気強く飲み込んだ俺は適当に相槌を打ってお茶を濁した。大学を出た俺たちはまず黄色い看板のコンビニでトイレを借り、そこでさらに五個入りのプラスチックのコップを買った。そして海に向かう県道を二人で高鬼（鬼は地面より上にいる奴をタッチできない。ただし、一箇所に留まれる時間は五秒）をするという攻守の激しいことをしながら歩いて俺たちは大学から二キロほど離れた海岸までやってきていた。

「あー、お前が高鬼やるとか言うせいで結構酔いが回ったわ」

「十月だけど暑いから泳いじやいましょうか！」

「やめろ。お前みたいな馬鹿な大学生がいるから毎年この海で海難事故が起こるんだ」

俺は『遊泳禁止。命を大切にしよう』という看板を指差して佑里を止めた。冗談で言っているかと思っていたら、シャツのボタンを外し始めたからだ。止められた佑里は非常に残念そうな顔をしてぶつぶつ言いながら俺のところに戻ってきた。バカでピーキーで酔っ払っていてもこの辺の常識は理解してくれるのか、と俺はそつと胸を撫で下ろしたのだが、目の前に来た佑里の方は撫で下ろすはずの胸元がぱっくり開いていて、白くて綺麗な谷間とそれを包む黒いブラジャーが俺に丸見えだった。

「ワザとだろ？」

「嬉しいでしょ？」

「まあね」

「立った？」

「ちよつとな」

「よかった」

嬉しそうに笑った佑里は、俺から焼酎と日本酒とコップが入った二枚重ねのビニール袋（この重さのせいで俺はヘトヘトになった）を奪って、ごつごつした石の上にそのまま座り込んだ。そして、コップを二つと持参した『おれの酒』と書かれた一升瓶を取り出してさっそく日本酒を注ぎ始めた。

「ほら、先輩も早く座って飲みましようよ」

自分の隣を手でばんばんと叩き俺を促す佑里。機嫌が良すぎるのが少し怖かったが、ここで座る以外の選択肢を取ることもできそうになかったので、俺は黙って佑里の横に座ることにした。

「へへへ、はい、これ先輩の分」

「サンキュ」

日本酒をなみなみと注がれたコップを受け取った俺は、こぼさなようにゆっくりとそれを口に運んだ。少量の液体が口の中に入ると、たまに家で飲む日本酒よりも少し辛いような気がした。

「どうですか、先輩？」

佑里は自分の酒も飲まずにキラキラした目で俺のことをじっと見ていた。しかし、日本酒の味が詳しくわからなかった俺はうまいともまずいとも評価できず、結局「飲みやすいな」という曖昧模倣な返事をするしかできなかった。その返事を聞いた佑里は「えー、それだけですか？」とひどくがっかりした様子で、なぜか良くわか

らないが自棄酒のように日本酒を一気に呷っていた。

「ごめん、俺、日本酒ってほとんど熱燗でしか飲まねえからさ」

「そんなの邪道ですよ。でも、確かに飲み会で先輩が冷酒を注文しているところは記憶にないですね」

「佑里、お前飲み会の記憶とかあるのか？」

「あ……そういえば、あんま無いっすね」

「だろうな」

毎回毎回無茶な飲み方ばかりして家まで運ばれてるのにそれで記憶が残っていたら驚きだし、記憶が残っているくらいならそのまま自分で歩いて帰れと説教してやるどころだった。コイツの酒乱のせいでサークルの男子の何人が吐瀉物をかけられ、殴られ、噛み付かれたのかわからない。もちろん俺もその被害者の一人であり、四年になって佑里の専属介抱係に就任してからは被害者の会の代表も兼任するまでになってしまった。

「あ、そうだ。先輩、ライター貸してくださいよ」

「なんだよ、急に」

「このコップを下から温めれば先輩の好きな熱燗になるじゃないですか」

「お前相変わらずバカだな……というか、去年の十月でタバコ止めたからもってねーよ」

「そうなんですか？」

「だからやるなら自分のを使え」

「え……」

「まあ、俺は偶には冷酒もいいと思ってるけどな」

わずか数十メートル先で飛び散る波飛沫。実家も海の近くなのでその光景は特段珍しいものではなかったけれど、他にやることもな

かったし、それに酒を飲みながら海を見るというのもいつもとは趣が違ったので、俺は波が打ち寄せる音に耳を澄ましながら黙ってその光景を眺めることにした。

「先輩」

「あん？　今、俺すつげえ黄昏ってるから手短に頼む」

「……私がタバコ吸ってたこと知ってたんですか？」

「え、お前タバコ吸ってたん？」

「なんすか、それ。殴りますよ？」

日本酒を一気に飲んで酔いが回ったのか、佑里は一段と暴力的になっていった。持っていたコップを俺に投げつけ、胸倉を掴んですごい目付きで睨んできた。

「私は真面目に聞いてるんです。誤魔化さないでください」

「なんだよ、そんなに怒るなよ」

「いや、マジでムカつく。先輩のそういう飄々としたところ、こっちが本気なのにわざとはぐらかす感じとかマジでイライラするんですけど。私のこと馬鹿にしてんですか？」

「してないよ。俺は一度だってお前を馬鹿にしたことはない」

「じゃあ今すぐ答えてください」

「知ってたよ」

「いつから？」

「一年くらい前から」

「なんで？」

「珍しく酔っ払った俺をお前が家で介抱してくれたとき、お前吸ってただろ」

「嘘でしょ。先輩あるとき完全に酔い潰れて寝てたし、私わざわざ家を出て外で吸ってたんだけど」

「だから言ってるんだろ、そういう迷惑な信頼感はいらねえって。な

んで男が女の家に行くのに酔い潰れて行くんだよ。そんなのただの馬鹿じゃねえか。あのときは酔ったフリしてたただけだ」

「先輩は私を騙したんですか？」

「騙されたと思うなら謝るけど」

「そんなのいらない。だから殴ります」

胸倉から手を放した佑里は、容赦なく俺の顔を殴った。グーだ。パーじゃない。ごつごつとした感じが実に痛々しいあのグーである。女の子とはいえ身長が165センチあり、中学のときは軟式テニスで全国大会にまで出たことのある運動神経抜群の佑里のパンチはマジで痛かった。頬を中心に脳の奥までピリピリした痛みが走り、口の中が気持ち悪かったので佑里のいない方に唾を吐くと、やはりそこには血が混じっていた。

「佑里、酒零れちゃったからもう一杯頂戴」

「はい、日本酒でいいですか？」

俺を殴った左手を二、三度ぶらぶらさせた佑里は新しいコップを出して、それに日本酒を半分くらい入れて「はい、どうぞ」と言いながら俺に渡した。それはそれは可愛い言い方で、お酒で少しトロントとなっている目もそれはそれは色つぼいのだが、忘れてはいけない。コイツは二十秒前、俺にグーパンチを食らわしたのだ。友情パンチではなく、全身全霊のグーパンチを。

「ねえ、先輩。私のこと嫌いになりましたか？」

「なんでそんなこと聞くんのだ？」

「タバコ吸ってたし、吸ってること隠してたから」

「いやいや、そこは今殴ったことに言及しようぜ。」

「嫌いじゃないよ」

「本当ですか？」

「だって俺は一年前からお前が吸ってたのを知ってたし、その吸ってたのを隠したがってのも知ってた。全部知った上でこうやって一緒に酒飲んでるんだから嫌いなわけないだろ」

「そうでした。先輩の唯一のこだわりは『嫌いな奴とは酒を飲まない』でしたね」

佑里はカーゴパンツのポケットから水色の箱を取り出した。

マイルドセブンのスーパーライト。

俺はそんなものを取り出したから、てつきり中のライターを取り出して熱燭を作り始めるか、それともタバコを吸うのかと思っていた。しかし、このバカでピーキーで酔っ払いなヒステリー女は何を考えたのか、取り出したタバコを箱ごとぼーんと投げ捨てた。俺の腕時計を投げたときのように綺麗なフォームで。

「よくわからんけど、捨てていいのか？」

「あんなクソマズイ煙なんてもういらない」

「佑里さん。それりゃあちよつとワガママ過ぎやしませんか？」

「第一、先輩が私に内緒でタバコを止めるのがいけないんですからね！」

まさかのとばっちりを受け呆然とする俺を尻目に、佑里は自分の分の新しいコップを用意して日本酒を再び飲み始めた。まったく、コイツの言動は相変わらず理解できない。理解……できないが、しかし、このことについてはなんとなくわかるような気がした。

マイルドセブンのスーパーライト。

それは俺が吸っていた銘柄だ。

もちろんただの偶然かもしれない。

でも、もしも佑里が俺の真似をしてそのタバコを吸っていたのだとしたら、

俺が吸うのを止めていたのを知ってショックを受けて、ちょっと怒ってしまうのも、

まあ、わからない感情じゃない。

ここで普通の奴ならそれはしょうがないこと、それは誰の所為でもないと自然に納得するのだろう。でもコイツは、佑里は、ちよつと普通の人間よりそういう考え方をするのが下手なのである。感情任せとまでは言わないまでも、普通の人が理性で感情を一つの選択肢にするところを、佑里は感情を感情のまま扱ってしまうのだ。だからコイツは普通の人にはうまく理解してもらえない。というか、むしろ佑里とうまく付き合っていくには理解しようとしては駄目なのだ。

理解して、

理解したような気になって、

他人が作り上げた理想を押し付けられるのを、

佑里は極度に嫌うから。

「そつだ、先輩。ちよつとしたゲームをしましょうよ」

日本酒を飲んだらまた機嫌が戻ったのか、急に佑里がそんなことを提案してきた。

「いいぜ。俺、すつげえ『ぷよぷよ』強いから」

「『ぷよぷよ』はやりませんよ。先輩リアルに強くてつまらないですもん。それにまずゲーム機がないでしょ」

「そつだつたな。うつかりしてたよ」

「あははは、あんまり適当なこと言つともう一発殴りますからね」
「お願いだからさ、それを決め台詞のように言つのはやめてくれ」

決め台詞どころか実際に殴るのも止めてほしいんだが。

「はいはい、そんな些細なことは気にしないで早速始めますよ。ルールは簡単で、あそこにある空き缶に先に石を当てた方が勝ちです」

佑里が指差した先には確かにビールの空き缶が一つ転がっていた。なるほど。さすがに自分で言うだけあつてルールは単純明快で、しかも佑里の思い付きなのに意外とまともな遊びである。俺は早速落ちている石を拾つて缶に向かって投げた。しかし、缶までの距離はおよそ五メートルと遠く、酔つ払った状態で投げた俺の一投は缶の若干手前に落ちて当たらなかった。

「はい、残念でした。ちなみに罰ゲームもありますからね」

「言つの遅くね!？」

「先に当てられたら絶対に相手からの質問に一つ答えなければいけません……あ、当たった」

「嘘やん!？」

佑里が投げた石は一直線に缶に向かっていき、カツンつと音を立てて空き缶を数十センチ動かした。いくらなんでも一発とか……これはもはやギャグとしか言いようがなかった。

「ふふふ、まずは私の一勝ですね」

「チクシヨウ……なんか納得いかねえけど……まあいいや。一応勝負だし、何でも好きなこと聞けよ」

「え、いいんですか、やったあ！　じゃあ、ええと、まずは何を聞こうかなあ」

コップに口を付けながら俺の体をじつくりと見つめる佑里。別に罰ゲームの定番の『何でも言うことをきけ』とかそういう無茶なものではなくただ質問に答えるだけなのに、なぜか俺の背中には嫌な感じの汗がひたひたと流れていた。そんなえも言えぬ恐怖に駆られた俺を、しかし完全に無視している佑里は、コップを右手に持ち替えると空いた左手を俺の肩にかけてきた。そして自分の体の方に俺をぐいっと引き寄せると耳元で、

「私とやりたいですか？」

そんなことを恥ずかしげもなく、むしろ俺を興奮させるように聞いてきた。

「ごめん、佑里。うまく聞こえなかったからもう一度言って」

「いいですよ。先輩は、私とセックスしたいですか？」

「ごめん、佑里。うまく聞こえなかったからもう一度いやらしく言っ
つて」

「うふふふ、いいですよ。聞こえるまで何度でも言っ
てあげる。せんぱいは、わたしとエッチしたいですか？」

「……正直に答えなきゃ駄目か？」

「駄目です」

「……正直に答えても引かないか？」

「さあ？ それはわかりません」

妖しくニコニコ笑う佑里の横顔を見て、はあ、と心の中で盛大に溜息を吐く。困った俺を見てここまで楽しそうにしている佑里に、つまらない嘘や冗談を言ったらおそらくまた俺は殴られるのだろう。まったく、どうしても俺はこんな損な役ばかり回ってくるのだろうか。愚痴を言ってもしょうがないのはわかってる。だけど、恥ずかしい本音を言わなければならぬ俺はせめてもの悪足掻きとして、佑里の面倒を見ることをやめてしまった、佑里を見捨ててしまった沙織ちゃんや黒木先輩のことを怨んだ。

「……やりたい」

「え？ うまく聞こえなかったんでもう一度言ってください」

「セックス、したい……です」

「え？ うまく聞こえなかったんで選手宣誓するように言ってみてください」

このクソ女が！

「ああ、俺は佑里とエッチしてえよ！ だってお前エロイんだもん！」

「……今すぐ？」

「な、なに？」

それは予想外の返しだった。

「今すぐしたいですか？」

「ちよっと待て。それはズルい。質問が二個目になってるし、とい

うか、いいかげん俺を離せ」

「ちなみに、私は先輩ならいつでもやらせてあげますよ？」

「……そういうこと言うとマジでやるけどいいの？」

試しに左手でシャツの上から胸を揉んでみた。するとてつきり嫌がるものかと思っていたら、佑里は少し官能的な声をあげて余計に俺の体を自分の方に抱き寄せるだけだった。

「ちょっと、先輩。いくらなんでも乱暴過ぎ」

「あ、悪い」

「でも、私が本気だつてことわかってくれました？」

「わかった。すっげえわかった。でも、やっぱり今は駄目だから俺から離れろ」

「何ですか？ ガンガンやってここ通るみんなに見せつけてやりましょうよ」

「そんな若気の至りのようなことできるか。それに俺、今日は用意してないし」

「私、今日は生でも大丈夫な日ですよ……たぶん」

「恐ろしいことを平気で言うな。もつと自分を大事にしろ。というか、そんなことより次のゲームやるぞ」

俺はしぶとく纏わりつく佑里を引き剥がして、足元で適当な大きさの石を探す。隣では「意気地なし」とか「ビビリ」とか「チキン」とか「ヘタレ」とか、とにかく俺の悪口を言いながら酒を飲んでいる佑里。まあ、俺としてはここは格好良く「紳士」とでも言ってくれと嬉しいのだけれど、確かに女の子にあそこまで言わせておいて何もしないのはビビリとかヘタレとか言われても文句は言えないかもしれない。それに用意してないとか言い訳しながら、実は俺のお財布の中には二個ほどコンドームが入っている。これがバレればきつと殴られるどころじゃ済まないだろう。最悪刺されて死ぬかもしれない。

れない。でも今は、少なくとも今は俺は佑里とそういう関係にはな
ってはいけないのだ。それはもちろん佑里のためでもあったし、な
により俺自身が――

「あ、また当たった」

「……っーか、なんで俺のは当たらないんだよ！」

明らかに佑里の方が酔っているはずなのに、なぜか俺の石は缶に
かすりさえしなかった。佑里は片手に日本酒、反対の手に石を握っ
て「逆に酔っ払った方が当たるんですよ」となんだか『どや顔』で
俺に講釈をし始めた。屈辱だった。かつてないほどの屈辱だった。

「じゃあ、二つ目の質問いきますねー」

「……好きにしろや」

俺は日本酒から芋焼酎にスイッチすることにした。しかし、いち
いちコップに注いだりするのも面倒くさいし、臭いと言って佑里は
芋や麦は飲まないのもそのままボトルに口をつけて飲むことにした。

「なんで大槻先輩は、沙織先輩と別れたんですか？」

「……そんなこと聞いてどうすんだよ？」

「先輩に質問する権利はありません」

「……簡単に言えば性格の不一致だよ」

「簡単に言わなければ？」

だからなんで質問が二個に増えるんだよ。

ズルイじゃん。

「俺のことが――」

——大槻君、ありえないよ

「——怖いんだって」

俺は努めて冷静な声でそう言った。

……

……

沙織ちゃんは同じテニスサークルに所属している背の小さい子で、佑里の一年先輩、つまり俺と同じ学年の女の子である。その沙織ちゃんと俺は二年生の春から三年生の冬まで付き合っていた。沙織ちゃんは日本人なのにハーフの人かと思うくらい顔立ちがはっきりしていて、しかもものすごくお洒落な子だった。俺は自分ではあまり意識していないけれど周りの友達曰く相当の面食いらしく、その所為か沙織ちゃんを初めて見たときもすごい可愛い人だなあとすぐに好感を持った。それに佑里ほどではないもののお酒も大好きで、だから酒好きな俺とはすぐに仲が良くなった。サークルの飲み会ではいつも俺の隣で酒を飲んでいたし、サークル以外の友達を集めたときも大抵その場に沙織ちゃんはいた。一年生の終わり頃になれば二人でテスト勉強をしたり、その打上げと言って街中を二人で飲み歩いたりもして、俺たちは段々友達以上の関係になっていった。そして、二年生になって初めての飲み会——それはサークルの新生歓迎飲み会での出来事だった。

いつものように一年生をいじめる一次会を行い、その後の生き残りを引き連れた四年生が傍若無人の振る舞いをする二次会を終えると、沙織ちゃんが飲み過ぎて気持ち悪いと言い始めたのだ。それは沙織ちゃんにしては珍しいことだった。なぜなら彼女はいつもは率先して三次会、四次会に行っていたし、そもそもその日はあまりお酒を飲んでいなかったからだ。あのお酒が大好きで、お酒にも強い沙織ちゃんが酔うなんて元々体調が悪かったのだろうか。そのときあまり深く考えなかった俺は単純にそんなことを思っていた。

二次会が終わったとき俺は男子便所に転がっている一年生の面倒を見ながら、飲み会の会場に忘れ物がないかをチェックしていた。そして、一年生にできるだけ吐かせて水を大量に飲ませた俺が、店員さんに謝りながら一年生を連れて店外に出ると、お店を出てすぐのところで蹲ってしまった沙織ちゃんを、三年生の女子の先輩が面倒を見ていた。

「次どうするんですか？」

俺は酔っ払った一年生をまだ生き残っていた一年生（余談だが、これが佑里である）に預けて、飲み会の幹事である三年生の黒木先輩に尋ねた。

「もちろん残ってる一年連れて三次会に行くぞ」

「死んでる一年生はどうするんですか？」

「今、タクシー呼んでおいた。話を聞くと潰れた三人は今日は一緒に泊まるらしいからそれでたぶん帰れるだろう」

「そうっすか。じゃあ次行きますか」

そんなことを黒木先輩と話していると、急に三年の女子の先輩に「ちよつといい？」と腕を掴まれた。何事かと思って一緒についていくと、先輩は俺を沙織ちゃんの下まで連れて行った。

「今日はもう駄目みたい」

「珍しいですね」

「そうね。だから今日は帰そうと思うんだけど、大槻君一緒に帰ってあげてくれない？」

「僕がですか？」

「そうよ、同じ二年生でしょ。それに最近すごく仲良いみたいだし」

「はあ、まあ否定はしませんけど」

「大槻君は飲み足りないと思うけど、ごめんね。はい、これ。タク代は私たちが出してあげるから」

先輩は三千円を俺に渡すと、そのまま黒木先輩率いるグループのところまで行ってしまった。確かにその日は新入生歓迎会ということもあって、新入生と相打ち覚悟で飲み比べをして殉職した二年生が大量に発生していた。その所為で今残っている二年生は俺と沙織ちゃんしかいないわけだが、しかしさすがに三次会に二年生が一人も出席しないのは先輩たちに失礼じゃないだろうか。

置いていかれそうになった俺は大声で黒木先輩を呼んだ。すると、それに気づいた先輩は笑顔で手を振って、

「大丈夫！ 話は聞いたから！ 四年生には俺が言っておくからお前は沙織を送ってやれ！」

そう言って、みんなと一緒に楽しそうに夜の街に消えていった。

「ふう……やれやれ」

蹲っている沙織ちゃんに「ちょっと待ってて」と声をかけた俺は再度居酒屋の店内に入り、レジのところにいる店員にもう一台タクシーを呼んでもらうようお願いした。そして店の入り口にあった

自販機でペットボトルの水を二本買って沙織ちゃんの下に戻った俺は、キャップを開けて気持ち悪そうにしている沙織ちゃんに握らせ
た。

「ごめんね、大槻君」

「気にしないで。今日はもう飲むのは止めにしたから気分良くなる
まですつと介抱するよ」

そう言っ
て俺は自分の分の水を飲んだ。基本的に俺は酒を飲んだ
ら飲み終わるまでノンアルコールの水分は摂らないことにしている。
そのこだわりは沙織ちゃんも知っていたから、俺が水を飲むのを見
ると小さな声で「ありがとう」と言った。

しばらく二人で店の前で水を飲みながら待っていると、一台の緑
色のタクシーが目の前に止まり後ろのドアが開いた。沙織ちゃんの
小さな体を抱きかかえた俺はそのまま倒れこむように後部座席に入
り、運転手に「大学前まで」と頼んで沙織ちゃんの住んでいるアパ
ー
ト
へ向かった。

……まあ、みんな所々おかしかったので薄々感づいてはいたけれ
ど、後に聞くとこれは沙織ちゃんと三年生の女子の先輩たちによる
作戦だったらしい。酔っ払った沙織ちゃんを俺に押し付けて二人を
くっ付ける作戦。なんとも有り触れていて、そして使い古されてい
た作戦ではあったけれど、反面みんなが好んで使うその作戦の威力
は絶大だった。元々仲が良かったので警戒心ゼロのまま沙織ちゃん
の部屋に入った俺は、彼女をベッドまで運ぼうとするとそのまま見
事な足払いをかけられベッドイン。その後すぐに飛び込んできた沙
織ちゃんに「好きだよ」と言われてキスをされた後は、当然自然の
流れのように抱き合った。正直、メツチャやった。二人とも泥酔じ
やなくてちよつと酔っている程度だったから逆にそれが歯止めを利
かなくして、結局シャワーなど一緒に浴びたりなどして一晩で計五

回もやってしまった。そしてその次の朝裸のまま起きた俺たちは、正式に付き合うことになった。

それから一年は楽しいものだった。二人で温泉にも行っただし、俺の実家で一緒にご飯を食べたこともあるし、もちろんいっぱいセックスもした。俺は沙織ちゃんが好きだったし、沙織ちゃんも俺のことを愛してくれて、喧嘩も偶にしたけど、それでも、それでも俺たちは幸せに大学生活を送っていた。けれど、付き合ってから一年が過ぎると段々と俺たちの関係はおかしくなってきたしまった。

ただし、沙織ちゃんの名誉のために言わせてもらうと、俺たちの関係が悪化してしまったのは決して彼女の所為ではない。彼女はいつだって俺のことを考えてくれて、見つめていてくれて、だから、だからこの件は確実に俺が悪かった。

俺が悪くて、

心底悪くて、

そして、

佑里が原因だった。

……

「怖いって……先輩、『でーいーぶい』でもしたんですか？」

「だから佑里、質問をポンポン……増やすんじゃないよ」

飲み過ぎか、過去を思い出した所為か、一瞬頭に刺すような痛み

が奔った。その様子を佑里が不思議そうに見ていたので、俺は誤魔化すように持っていた芋焼酎を一口口に含んだ。

「確かに俺が悪いんだけどさすがに暴力は振るってねえよ」

「じゃあ、なんで」

「俺は……『ありえない』んだって」

「は？ なんすか、それ。意味がよくわかんないんですけど」

「さあ。俺にもよくわからん」

焼酎を飲みながら佑里に同調してそんなことを言ってみるが、もちろんこれは嘘である。本当は意味など、原因などわかりきっている。ただ、それを本人の前で言うことは、たとえ佑里の機嫌を損ね、その所為で殺されようとも俺にはできなかった。

——ありえない。

——大槻君、ありえないよ。

——なんで、

——なんで、佑里とずっと一緒にいて我慢できるの？

「よくわかんないって……ふざけんなよ!!」

「——っ!？」

やっぱり俺は地雷を踏んだらしい。

中身が四分の一ほど入った一升瓶が俺の目の前を横切り、二メートルほど先に落ちると悲しげな音を立てて割れた。頭の位置が数センチずれていれば確実に死んでたな、と思いながら俺は割れたビンから佑里の方に顔を向けると、彼女は今まで見た中で一番怖い顔をして怒っていた。普段細い目はカツと見開かれていて、頭に血が上っているのか白い肌も真っ赤に上気していた。まったく……お前がこんなことばかりするから俺が沙織ちゃんにフラれるんだぞ。ちょっとは自重しろや。

「そんなに怒るなよ」

「こんなの怒るに決まってるじゃん！！あの女はよくわからない理由で先輩を振ったんですよ！！それになんだよ、ありえないって。完璧にふざけてるし！アイツ、マジちょつと自分が可愛いと思ってるチョーシ乗ってるんじゃないの！！」

「バカ、佑里落ち着け」

「だってそうじゃん！先輩知ってますか、あの女、自分から先輩のこと捨てたくせに、未だに未練タラタラなんですよ？毎日のように私のところにメールしてきて『最近、大槻君と飲んでる？』とか『今度大槻君とかと遊びに行こうか』とか、マジウザイくらい連絡してくるんです。それなのに、それだけ先輩のこと好きなくせに、先輩のこと捨てやがって！！」

「佑里……」

「でもやっぱり一番許せないのは、先輩のことを怖いとかありえないとか言ったことですよ！！どうして、どうしてそんな見当違いな事を言えるのか、私には理解できない！！先輩ほど優しく、先輩ほど受け入れてくれて、先輩ほど温かくて、先輩ほど楽しくて、先輩ほど先輩ほど先輩ほど……とにかく！！こんな先輩を自分勝手な理由と感情でフツたあの女を、沙織を、私は、私は絶対に許さない！！」

怒り狂った佑里は急に俺に抱きついてきたと思ったら、そのままズボンに手をかけた。そしてポケットを探り、そこから俺の携帯電話を乱暴に取り出した。

「何するつもりだ」

「呼び出す」

その言葉を聞いた瞬間、俺は携帯を持っている佑里の左手を掴んだ。

「やめろ」

「やだ、絶対に呼び出す。それでボロクソに文句言って、最後に殴ってやる」

「絶対にやめろ」

「やだ」

「やめないと怒るぞ」

「やだ！！ やるって言ったらやるの！！」

「やっ
たらもう絶対に一緒に飲んでやらないからな」

動きが止まった。

「そんなことしたら俺はこれから絶対にお前と酒は飲まない。お前が酔い潰れても介抱しない。メールも絶対にしねえし、電話なんて以ての外だぞ。大学では会っても無視するし、お前がいないところではお前の悪口だけ言う。サークルにも居れると思うな。どんな手を使ってでもお前を追い出してやる。そして俺はお前との思い出をすべて消す。俺の中にある楽しかったこと悲しかったことムカついたこと嬉しかったこと、つまり俺が俺であるために必要な大切のものの中からお前は消えるんだ。それでもいいか？ それでもいいんだったら沙織ちゃんを呼び出せよ」

俺は掴んでいた手首を離れた。そして、反対の手で持っていた芋焼酎を一息で飲めるだけ飲んで、そのままボトルを軽く放り投げた。おそらく、今日はこれ以上飲めないだろうから。

「……ヤダ」

小さな声で呟いた佑里は、俺の携帯を両手で持って固まっていた。固まって、小刻みに震えていた。震えて、さっきまで怒っていた顔をクシャクシャに歪ませて、号泣していた。

「ヤダ!!」

腕時計だけに飽き足らず、俺の携帯まで放り投げた佑里はそのままの勢いで俺を押し倒し、抱きしめながらキスをしてきた……否、本当は俺を殺そうとしているのかもしれない。右手は服を掴む

と同時に爪が鎖骨の辺りに突き刺さっていたし、頭を後ろからがっしりと掴んでいる左手は完全に髪の毛を引っ張っていた。それにあろうことか佑里はキスをしながら俺の口の中を噛み始め、最後には力の限り舌を噛んできた。嘘を吐くと閻魔様に舌を抜かれるぞ、という迷信は聞いたことがあったし、自殺のとき舌を噛み切るやり方があるのも知っていたけれど、まさか他人に舌を噛まれるのがこれほど痛いものだとは思わなかった。酒をしこたま飲んで痛覚を麻痺させていなかったら、とてもじゃないが耐えられる痛みじゃなかった。しかし、そもそも俺はこの痛みを耐える必要があるのだろうか。さつさと「いてえな!!」とか言ってこの女を跳ね飛ばしたって、それは何の不都合もなく、むしろ当然の行動ではないか。

——大槻君、ありえないよ

でも、俺は当然の行動を取らない。

佑里の気が済むまで好きにやらせる。

だって、それは俺にしかできそうにないから。

「ごめんね、沙織ちゃん」

確かに俺はありえない人間だよ。

中編（後書き）

感想等ありましたら気軽にどうぞ

後編（前書き）

中編をほんの少しだけ手直ししました。そちらと繋がっているので、修正前を読んだ方は少し違和感があるかもしれませんが、読み返していただくと整合性は取れてると思うので、気になる方は一つ前にどうぞ。

後編

俺とキスするのに飽きたのか、それとも噛むのに満足をしたのかはわからないが、とにかく俺から離れた佑里は、そのまま波打ち際まで走っていき盛大にゲロを吐いていた。海を汚すなよ、と注意をするのが先輩として人生の先達としての義務なのはわかっていたけれど、いかんせん俺もだいぶ酔っていたので今日のところは大目に見てやろうと思う。いつも厳しいだけが教育ではないのである。

ふらふらと立ち上がった俺は一応無事だった携帯を拾い上げ一度県道に戻り、どこかに自動販売機がないか探した。すると二百メートルくらい離れた場所に潰れかけた駄菓子屋みたいな店があり、その店の前に赤い色をした自販機があった。俺はゆっくり歩いてそこまで行き、ペットボトルの水を二本とお茶を購入して、また飲み物を落とさないようにしながらゆっくりと元の場所へ戻った。すると、

「うああああああああん！！先輩がいなくなっちゃったああ！！私^がわがまま言ったからだあ！！」

二十歳の女が迷子になって泣き叫んでいた。

……

……やば、すげえ可愛い。

しばらく血だらけの口を水で濯ぎながらその様子を眺めていた。しかし、いつまで経っても泣き止む気配はなく、海沿いを散歩やう

ンニングしている人達が何事かという目で海岸にへたり込んでいる
佑里を気にし始めたので、しょうがなく俺は佑里を迎えに行くこと
にした。

「佑里、帰るぞ」

「うつぐ、え、えつぐ……あ、しえんぱい」

「ほれ、水で口の中綺麗にしろ」

「は、はい……お、せわけ、ます」

俺からペットボトルを受け取った佑里は素直に水で口を濯ぎ、そ
して残った水を全部飲み干した。おお、酒といい水といい、飲みつ
ぷりと体だけは一人前だな。ただし、これ以上海にゴミは捨てるな
よ。

「落ち着いたか？」

「な、なんとか」

「じゃあ帰るぞ」

「……立てません」

「何？」

「お、おんぶしてください！」

俺、酔っ払いの172センチ。

佑里、泥酔の165センチ。

おいおい、コイツ無茶苦茶言い過ぎだろ……

……

……

佑里を初めて介抱したとき、俺は佑里を一人で負ぶって家まで運んだ。俺はそのとき二年生で、その日はちょうどサークルの追い出しコンパだったから確か三月のことだったと思う。いつもは募らなくても沸いて出てくるはずの佑里の介抱役の一年生の男たちが、その日に限って誰も出てこなかったのだ。まあ、電柱にしがみ付いて蟬のモノマネをしている女を送り届けたいと思う奴などそういるはずはないのはわかるが、さすがにそのまま佑里を放っておいて次の店に行くわけにもいかない。その日も相変わらず飲み会の幹事をしていた黒木先輩が四年生に「早くしろ」と言われて困っていたり、一年全員にお願いされたり（意外と俺は同級生よりも一年生と仲が良かった）したこともあり、俺はその当時彼女だった沙織ちゃんに断りを入れて佑里を家まで運ぶことにした。

サークルのみんなと別れてから佑里の家まで行く間はとりあえず地獄だった。まず帰ろうとした時点で佑里は「私も行く！」とか「絶対戻る！」とか喚いた。それを何とか説得して手を引っ張って帰ろうとすると「触るな！」とか「自分で歩ける！」と言って容赦なく殴ってきた。それなら好きにしろと離れて歩いていると、フラフラと車道に出て車に轢かれそうになるので危ないと思い再び近付いていくと、やっぱり殴られた。これじゃ埒が明かないと思った俺は、素早く佑里の前に回りこみ、そのまま彼女の体を担いだ。意外なことに担ぐこと自体にそれほど佑里は拒否感を示さなかったが、その代わりなのか肩に手を置いて俺の肩を噛んだ。噛まれた瞬間、なぜ一年生が進んで佑里を送り届けようとしなかったのかが少しわかった気がした。その後も楽しそうに髪の毛を引っ張ったり、足を蹴ったりする佑里に何とか家の場所を聞き出した俺は、首からペンダントのようにかけていた鍵を借りて部屋の中に入った。しかし、玄関に入ると佑里の態度は豹変した。

「降ろして」

さつきまで楽しそうに騒いでいたと思ったのに、急に冷静になってそう言った佑里。まあ、俺としてもその言葉を拒否する理由はないので、背中から佑里を降ろすと、彼女は黙って部屋の奥の方に入ってしまった。俺はそんな豹変した佑里の姿を玄関で眺めながら「もう帰って大丈夫なのかな？」と思っていたが、すぐにバスタオルを持った佑里が戻ってきて「あがるならどうぞ」と言い、そのまま自分は風呂場に入ってしまった。何がなんだかわからなかった俺は、とりあえず部屋の中に入りフローリングの床の上に座った。

佑里の部屋は意外と綺麗だった。しかし、それは整頓されているというものではなく、ただ物が少ないことによる綺麗さだった。テレビとベッドとパソコンの置いてあるワークデスク、そして部屋の真ん中には小さな四角いテーブルが置いてあり、俺はそのテーブルの前に座っていた。しかし、座っていてもやることがなかったのとおりあえず俺は携帯を取り出して黒木先輩と沙織ちゃんに佑里を無事家まで運んだことをメールした。メールを打ち終えたあと台所に行った俺はガラスのコップを借りて水を飲みながら現状をよく考えた。そして、さすがにこのまま風呂上りの佑里を待っているのは良くないな、という結論を出した。しかし、あれだけ飲んだ後ですぐに風呂に入ってしまった佑里をこのまま放っておくのも危ない。そこで俺はワークデスクに置いてあったいらなさそうなドイツ語のプリントの裏に『外にいるから風呂から出たら呼んで。一時間経って出てこなかったらまた見にくるから』と書いて、それを部屋の真ん中にあるテーブルの上に置くと部屋を出た。

外は三月ということもありものすごく寒かった。でも、酔っ払った俺はそんなことはさして気にせず、水を飲みながら携帯のアプリで『ぶよぶよ』をやって佑里を待っていた。しかし、いかんせん酔った手付きでの『ぶよぶよ』は難しすぎた。『ぶよ』が回りすぎるのだ。あまりにも難しくつまらなかったので、急遽『桃太郎電鉄』をダウンロードして、さてゲームを始めようとしたところで、バス

タオルを体に巻いた佑里がドアを開けて顔を出した。

「……何してるんですか？」

「桃鉄」

「……風邪引くと困るんで、中に入ってください」

「いや、大丈夫そうならもう俺帰るけど」

「エッチしないんですか？」

冷静で、ひどく純真無垢な顔をして佑里はそう言った。

「そのつもりだと思って、私お風呂に入ってきたんですけど」

「え、なんで？」

「違うんですか？」

本当に、本当に理解できないといった感じで佑里は俺のことを見ていた。

「みんなそうでしたよ。酔っ払った私を家まで送ろうとした男の子はみんな私とやりたがってました」

「いや、でも俺彼女いるし」

「彼女いる男の子も私とエッチしたがつてましたよ？」

「へえ、そんなもんか。で、お前はその男の子みんなとやっちゃうの？」

「一緒に帰る途中で嫌気が差してみんな帰っちゃうから、ここまで来たのは先輩が最初です」

「そっか。でも、これから俺と帰るときはそんなこと気にしないでもいいぞ。ということで、俺はもう帰るわ」

俺は持っていたコップを佑里に返した。今日は沙織ちゃんの部屋に泊めてもらう予定なので、俺はポケットの中に入っている合鍵を

確認しながら佑里の部屋を後に、

「は、なにそれ？」

頭に奔った激痛とガラスの割れる音を聞いた俺はその場に崩れ落ちた。俺は地面に蹲りながら、後ろでドアの閉まる音を聞いた。結局、その日沙織ちゃんの部屋に行くことを断念した俺は、頭から血を流しながら五キロ離れた実家まで歩いて帰ることにした。

めでたし。

めでたし。

……

……

「先輩、気持ち悪いからもつと『そーと』歩いてください」

「はあ、はあ……バカ。そんな余裕があるか」

俺は来たとき通った県道を佑里を背負いながら歩いていた。辺り

はもう若干薄暗くて、肌寒い。そんな中を大人の男女がおんぶしながら歩いているのは、小説やドラマだったら意外と良いシーンなのかもしれないが、実際の現実ではおかしいこと極まりなかったし、何よりこの男女は二人とも酔っていたり、ゲロが付いていたり、血を流していたりと満身創痍もいとこだった。

「お、お前……ちょっと太っただろ」

「ぎ、残念ながら二キロほど……」

「それなのにおんぶしろなんて頭おかしいんじゃないか？」

「でもカップも一つ大きくなったからチャラですよ、ほらほら」

背中に胸をぎゅっと押し付けてくる佑里。それは確かに申し分ない大きさに気持ちよかった。しかし、もそもそ動く所為で非常に背負いづらいし、カップが増えたところで体重が増えたことはチャラにはならないし、というかやっぱりコイツが喋っていることは意味がわからなかった。

「ふう……とにかくもう少しだからしっかり抱きついてろ」

「はい、わかりました」

「クソッ、こういうときだけ素直なんだよな、お前は」

「えへへへへ」

ぴつたりとくっ付いた佑里の体温を感じながら、俺は緩やかに下っているアスファルトの道路をゆっくりと歩いた。すると前から自転車で二人乗りをした中学生のカップルがやってきた。前で自転車を漕いでいる男は俺たちに気がつく、後ろに乗っている女に声をかけて二人で俺たちを見ながら笑った、笑いやがった。恥ずかしい。今世紀最大級に恥ずかしい。あまりの恥ずかしさに男の方に喧嘩を売ってボコボコにして彼女の前で俺以上に恥ずかしい思いをさせてやろうとも思っただけで、その恥ずかしい格好をしているのは他な

らぬ自分たちだったから喧嘩を売ることも憚られる。そこで俺はこんな姿を見られて佑里の方はどう思っているのだろうかと考えて、少し首を捻って後ろを向いてみた

……手を振っていたバカがいた。

いつも心の中で吐く溜息をリアルに吐いた。なんでこうもコイツは俺を疲れさせるんだ？

「うふふふ、見せびらかしちゃいましたね」

「お願いだからそういうのはやめてくれ」

「呆れちゃいましたか？」

「ちよつとな」

俺が一度立ち止まり少しずり落ちてきた佑里の体を持ち直すと、佑里はそれに合わせて首に回した腕に少し力を入れ、そしてそのまま俺の肩に顎を乗せた。それはなんだか縁側で首を伸ばして眠る猫のようにも思えた。そういえばコイツの気まぐれな性格は猫にそっくりだな。

「ねえ、先輩」

俺の肩に顎を乗せた佑里は、甘えるような声で耳元に囁いた。

「ごめんね」

「……どうした、急に」

「なんだか先輩に謝らなきゃいけない気がしたの」

「別にそんな必要はないと思うけど」

「今日はいっぱいわがまま言ったし、いっぱい殴っちゃった」

「いつもと変わらねえよ」

「うん、変わらない。変われないの。変わりたいとも思わないの」

「じゃあ謝る必要なんてないじゃん」

「それはそうだけど……」

自分で言うておいて佑里は納得できない様子だった。俺はそんな不器用で気まぐれな後輩に、かつてと同じ言葉を送った……今日はコップも持っていないことだし。

「俺といるときはそんなことを気にしないでいいんだぞ」

「……うん」

「あれ、キレないの？」

「あのときは先輩がなんかスカしていたように感じたからキレただけです。あれから二年近く経って、今は先輩が本気でそう思ってることがわかったから怒りませんよ」

「……そっか」

俺は佑里の言葉を聞いて小さく頷いた。しかし、本人は変わらない、変われないなどと言っているが、同じように二年近く佑里の姿を見てきた俺は彼女が少しずつ変わってきたのを知っていた。相変わらずすぐキレルし、キレると手加減容赦がないけれど、こうやって昔より理不尽に怒らなくなったことはその証拠の一つだと俺は思う。

そして願わくば、

願わくば、佑里にはこのまま普通の女の子になってほしいと思う。

俺みたいな無気力な男に執着することなく、

普通の男に恋することができる、

普通の女の子に……

「なあ、佑里」

「はい？」

「俺のこと好き？」

「大好きです」

即答。少し緊張した。

「じゃあ俺と付き合いたい？」

「付き合いたくないです」

これまた即答。これはなんだかホッとした。

「だよなー、よかったよ」

「ん、どうしたんですか？」

俺の急な質問に佑里は終始不思議そうな様子だった。

今はこの程度でいい。

焦ってはいけない。

だって、今佑里の傍にいるのは俺だけなのだから。

……
……

沙織ちゃんに「ありえない」とフラれた俺だけど、どちらかといえばそれは佑里が言われ続けたことだった。

アイツはありえない。

アイツは普通の女の子じゃない。

アイツは常識を知らないし、

アイツは加減を知らなさ過ぎる。

アイツは可愛いからって調子に乗りすぎで、

アイツはスタイルが良いからって人を見下しすぎである。

横暴だ。

横柄だ。

富永佑里という女を間近で見て、そういうものを肌で感じた人間の大半はすぐさまその下を去っていった。一度目は酒の席だったから、となんとか許容した人間は二度目の回合で脱兎の如くその場を逃げ出した。だから三度目以降に残った人間はとも慈悲深い心の持ち主だったと思う。しかし、そんな慈悲深い心を持って佑里のことを理解した人間でも、度重なる惨事、堂々巡りの悪夢、激情のスパイラルにその身をずっと晒していると、ある瞬間に突如、予告も

なくぶつんと切れてしまい、そうなればもう佑里の傍にはいられなかった。そうして長い年月をかけ一人、また一人と富永佑里の下から理解者は去っていった。一年のときから一緒にいた同じ学科の女の子も、姉妹のように仲が良かった沙織ちゃんも、そして、

「ごめんな、大槻。俺でもアイツの面倒を見ることだけは無理だった」

俺が知る限り最高に面倒見が良く、誰よりも懐が深いあの黒木先輩でさえ佑里とは共に歩むことはできなかった。

「でも、きつとお前なら——」

先週久しぶりに電話で話したとき、黒木先輩は俺に何か言おうとした。だけど、俺はそんな先輩の言葉は聞きたくなかったからすぐさま電話を切った。どれだけ尊敬していても、『お前なら——』の続きにどれだけ素晴らしい語句を並べられても、黒木先輩は佑里を見放して、諦めたのだ。佑里にとって先輩は救いだったのに、普通の女の子になれた数少ないチャンスだったのに、それを先輩は捨てたのだ。その事実は到底許せるものではなかったし、さらにそこで俺を頼った先輩を俺は軽蔑した。第一、このことで俺を頼られても困るのだ。

俺は、

俺では駄目なのだ。

俺は普通の男じゃないし、

俺は普通の人間じゃないのだ。

だから俺では佑里を救い出すことはできない。

だから俺では佑里を普通の女の子にすることはできない。

でも、佑里はきつと……いや、絶対にこんなことは求めていないだろう。彼女はそういう人間だ。今ある自分を、今まで培ってきた自分をひたすら貫く。他人の目は気にしないし、他人の意識なんて考慮しないし、他人の理解なんて必要としない。つまり俺が佑里を救いたいだの普通の女の子にするだのと言うことは、彼女にとっては迷惑でしかないし、もっと言えばそれは彼女の怒りの対象なのだ。わかってる。それは十分、十全、十二分にわかってる。だから、これは俺のわがままなのだ。佑里を救いたい、普通の女の子にしてやりたいと思うのは俺の自分勝手なのだ。俺が、無気力な俺が望む唯一の……けれど、

けれど、もしも佑里が本気で俺を求めるようなことがあったら、

そのとき俺は、

俺は……

……

……

「今日は久しぶりに先輩と飲めて楽しかったです」

太陽がちやうど沈んでしまった頃、俺たちは佑里のアパートに続く細い路地の前に到着した。いつもなら「そのまま部屋まで運んで！」と暴れたり、再三エロい要求を突きつけられるのだが、今日は素直に背中から降りた佑里は、俺の前に回り込んでしっかりと頭を下げながらそんなことを言った。

「今度は先輩から誘ってくださいね。私、自分で計画したりメールしたりするの面倒くさくて嫌いですから」

俺はお前と一緒にいることが面倒くさいんだが、なんて言えたらどれほど心がスカツとすることだろうか。まあ、殴られるのは嫌だから絶対に言わないけど。

「そうだな。まあ、俺も卒論やらんといかんから頻繁につて訳にはいかないけど、偶にならどつか飲みに連れてつてやるよ」

「先輩、車持つてるんでしょ？ 飲み会ばかりじゃなくてデートもしましょうよ」

「……どこに？」

「今日は海に行ったから次は山はどうですか？ 頂上まで登るのを競争するんです」

「で、頂上でお前は酒を飲んで、俺はまた酔っ払ったお前を担いで山を下るんだろ？」

「ザッツライト」

「指立てんな」

ただの地獄巡りじゃねえか。

「わかったよ。それも含めて考えておくから、俺はもう帰るわ」

「ねえ、先輩」

「あん？」

帰ろうとして踵を返すと、すぐに佑里が呼び止めた。まったく、これ以上俺に何を求めるっていうんだ。

「なんで、今日は来てくれたんですか？」

「……お前が呼んだからだよ」

「私が？」

「そう、佑里が。良くも悪くもそれ以外の理由はないよ」

さすがに良い理由も悪い理由も本人に向けて言うことはできないけれど、それだけは言えた。佑里が、富永佑里が直接俺に来てほしいと召集をかけた。それだけが真実で、もしも他の誰からの連絡だったらたとえ佑里がその場にいたとしても、俺はそこには行かなかった。

つまり、俺はそういう人間なのだ。

「だから、また急に飲みたくなったりしたらいつでも呼べよ」

俺は佑里にそう言って大学の駐輪場に向かって歩き出した。ただ自分でそう言ってみたものの、面倒くさがり屋の佑里が自分から連絡をしてくることはほとんどない。だから佑里の言うとおり今度はおそらく俺の方から誘うことになるだろう。俺も意外と面倒くさがり屋だし、なにより佑里と飲むのは体力気力が大量に必要で大変だから本音を言うつもりが……ま、その辺はしょうがな

い。今の佑里はほとんど一人ぼっちの状態だから、アイツの周りには俺しかないのだから、やってやるしかない。

駐輪場に行き、原付からパソコンの入った鞆を取り出した俺はそのまま近くのバス停まで歩いていく。就活などで忙しく、今日は半年振りに佑里と飲んだわけだが、やっぱりすごく疲れが溜まった。俺は佑里の下から離れていった人達を多少怨んでいたけれど、この疲れだけは認めざるを得ない歴然とした事実だった。

「いつまで続くんだろ、この関係」

複雑だと思う。茶番だと思う。でも、これは俺が俺である限り続けていかなければいけない関係であった。

「でも、まあ、ぼちぼちと頑張りますか」

そんなやる気があるんだかないんだかよくわからない気合を入れた俺は、やってきた赤い色をしたバスに乗り込んだ。

そして、その夜。

朝から酒と水以外何も口にしていなかった俺は母親が作ったちらし寿司を大量に食べた。口の中が醤油でものごく沁みたけど、それでもかまわず俺はトロサーモンを頬張った。そして、食後のお茶を飲んだ俺はお風呂にゆつくりと浸かり、それから出ると卒論の続きに取り掛かった。佑里には格好付けてみたけれど、実はあまり進んでなくていっぱいいいのである。

自分の部屋でアイスコーヒーを飲みながらパソコンに向かうこと

二時間。デスクトップの右下の時計が十一時二十六分になったとき、充電してあった携帯が鳴った。佑里ほどではないにしても、そこそこ友達の少ない俺に夜中メールや電話が来るのは珍しいことであった。そのとき調度アイスコーヒーも無くなってしまったので、新しいコーヒーを入れに行くついでに携帯を開いてみると、届いていたのはその佑里からのお礼のメールだった。

——今日はありがとうございました&ビールゴチになりました！
！ 久しぶりに楽しかったです！ 絶対、絶対にまた飲みましょう
ね（はぁーと）

「お礼のメール、ね。可愛いところあるじゃん」

まったく、

本当に、

本当に、

コイツは俺の期待を悪い意味で裏切らない。

!

ブチ切れた俺は持っていたガラスのコップを床に投げつけて、

そして、

部屋を飛び出した。

——私、自分で計画したりメールしたりするの面倒くさくて嫌いですから

アイツは普段絶対に自分から他人にメールをしないのだ。

後編（後書き）

後編ですが、エピソード付きです。感想等ある方、いつでもどうぞ。

エピローグ（前書き）

最終話ですが、エピローグという名の第四話になっている気がします。相変わらず書くのが下手ですね。でも、楽しんで頂ければ幸いです。

エピソード

……

……

自分に興味が無くなったのはいつからだろうか。

「なんで、佑里とずっと一緒にいて我慢できるの？」

自分のことが徹頭徹尾余すところなく嫌いになったのはいつからだろうか。

「おかしいよ。ありえないよ。罵声浴びせられて、大怪我させられて、謝られもしないで、それなのに大槻君は佑里から離れないどころか、自分から近寄っていつてる。どうして？ どうしてアナタはそんなことをするの？」

自分のことをゴミ屑のように扱うようになったのはいつからだろうか。

そして、

「ねえ、佑里のこと好きなの？」

「好きじゃないけど、嫌いじゃない」

「私のことは？」

「もちろん好きだよ」

「じゃあ、なんでよ！！　なんであの子の傍に行くのよ！！　私はアナタの彼女で、アナタは私の彼氏なのよ！！　どうしてアナタは佑里の傍に行くの！？　どうしてアナタは佑里とずっと一緒にいて我慢できるの！？　どうしてアナタは佑里がやることを全て受け入れて、許しちゃうのよ！！　それはあの子のことを好きな人がやることであって、あの子のことを大切だと思っている人がすることであって、アナタが、私の彼氏である大槻君がすることじゃないでしょ！！！」

自分の為に生きることを止め、

誰かの為だけに生きようと決意したのは、

いったい、いつからだっただろうか？

「ねえ、大槻君。私、何か間違ってること言ってるかな？」

「言ってるないよ。沙織ちゃんの言ってることは正しいよ。正論だよ」

「じゃあ——」

「でも、正論はいつだって無慈悲だから」

「え？」

「正論はいつだって無慈悲で、正答は容赦なく誤答を踏み躪るし、正当は不当を一切認めない」

「なに、言ってるの？」

「俺は、それは平等じゃないと思う」

俺は納得できなかった。誤答が正答に踏み躪られるのも、不当が

正当によって一切認められないことも、悪が必ず正義に倒されてしまふことも、そして、それらの所為で一人ぼっちになってしまった人間が周りから『自業自得だ』と思われてしまふことも、全部、全部納得できなかった。彼らにだって理由はあるのに、彼らだってできることなら正答に辿り着き、正当と認められて、高々と正義を掲げたかったはずなのに、正論はそれらを全て光の衣で覆ってしまうのだ。

「俺は自分のことが大嫌いで、自分の為に生きていたいと思わないから、自分以外の誰かの為に生きることを決意した。そして、その為なら自分の命なんてゴミ屑のように捨てても構わないと思ってる」
「で、でも、それじゃあ私は？ 大槻君は私のことが好きなんですよ？ それなら私のために——」

「沙織ちゃんには、俺以外にも周りにたくさんの方がいるから」

それじゃ駄目なのだ。

俺以外の方が周りにいては駄目なのだ。

独占欲じゃない。

優越感を感じたいわけでも、

劣等感を感じたくないわけでもない。

ただ、

俺以外の方が周りにいたら、

俺以外でも代用が利くのなら、

それは俺が俺であるという意味が薄れることであり、

俺がそこにいる意義が曖昧になることであり、

大槻亘という人間の価値が消失してしまうことになる。

自分に興味はないし、

自分のことが大嫌いだし、

自分のことをゴミ屑だと思っているけど、

この世に生を受けた身として、

自分が無価値な人間とだけは思いたくなかった。

「だから、佑里なんだ」

みんなに愛される沙織ちゃんじゃなくて、みんなに疎まれる佑里。

メジャーじゃなくてマイノリティ。

正答ではなく誤答。

正当ではなく不当。

正論ではなく曲論。

正義ではなく悪。

そう、

俺は弱者の為に立ち上がり、

少数の為に命を削るときにだけ、

生きている、と実感できるのだ。

そして、そこに正しさは、

ましてや愛など……いらなかった。

「沙織ちゃんのこととは本当に好きだけど、アイツに、佑里に求められるとゾクゾクするんだ。アイツに罵声を浴びせかけられて、大怪我させられて、謝られなくて、それでも俺が、俺だけがそれを許して全部受け入れた結果、アイツが少しでも喜んでくれるなら、僅かでも救われたと思うてくれるなら、俺は、俺は、こんな本望なことはない」

俺は笑いながらそう言った。

沙織ちゃんは笑わず、もう一度「ありえない」と呟いた。

……

……

財布だけ持って家を飛び出した俺は、車庫に入っていた黒のワゴ

ンRステイングレーに乗り、怒りに任せてアクセルを思いつきり踏み込んだ。

「クソッ！！ これで飲酒運転で捕まったら絶対にアイツのことぶん殴ってやる！！」

佑里は普段絶対に自分から他人にメールをしない。アイツはバカでエロくてピーキーでアル中で自分勝手に加減知らずなヒステリー女だけど、人に何かを強制させたり、束縛したりすることを病的なまでに嫌がるのだ。自由人の彼女は、他人の目は気にしないし、他人の意識なんて考慮しないし、他人の理解なんて必要としない。でも彼女は自由を愛するが故に他人の自由にも敏感で、自分自身が嫌なこと、つまり誰かの自由を奪い取ったり侵害するような行動は極力控えているのだ。そして、メールや電話は究極的に言えば相手の自由や時間を奪い、何かを相手に押し付けてしまうものである。だから佑里が、自分で嫌だと言ったことは絶対にやらないはずの佑里が、百歩譲ってお酒の誘いならまだしも、お礼のメールなんていうものを送ってくることなど普通ではまず考えられない。

「チクシヨウ！！」

……不器用な奴なのだ。今まで真剣に誰かを頼ったことがないから、どうしたらいいのかわからないのだ。その上、俺が佑里のことを理解しているように、彼女の方も俺がどういう奴で、俺を求めるとはどういうことなのかということをしつかりと理解していたからきつと彼女なりに戸惑ってあんな中途半端なメールを俺に打ってしまったのだろう。その辺の状況は佑里からのメールを見た瞬間になんともなくわかった。ただ、一貫して言っているように俺は……こんな結末は望んでいなかった。

佑里には普通の女の子になってほしかった。

俺がなり損ねた普通の人間になってほしかった。

そして、その為なら何でもやってやるつもりだった。

でも、その『何でも』の中にも例外が一つだけあった。

途中までならいい。

途中までならたとえアイツのわがままで殺されたとしても俺は文句は言わない。

この命は誰かの為に使うとずっと前から決めていたから。

だから途中までなら好きなだけ俺を求めればよかった。

でも、

最後は、

最後は駄目だ。

最後だけは俺を選んで駄目なのだ。

「最後に俺なんか選んじまったら……普通の女の子どころか絶対に幸せになれねえじゃねえか!!」

この命を誰かの為に使うとずっと前から決めていた俺にとって、この命の所為で誰かを不幸にしてしまうことはもっともやってはい

けないことなのだ。それは人生が無意味とか命が無価値とか、そんなことよりもさらに悪い、

『有害』

ということだから……

「チクシヨウ。チクシヨウチクシヨウチクシヨウ……畜生！！　なんでこんなことになるんだよ。どうして俺がこんな思いをしなきゃならねえんだよ。俺みたいなクズがしゃばるとみんなに迷惑がかかると思ったから、いつもひっそりと過ごしてたのに。せめてこのくだらない命を使ってみんなの為に何か良いことができたらそれだけで幸せだなあって思ってただけなのに……クソ、テメエ、おせえんだよ！！」

法定速度を守って走っていた前のエルグランドに罵声を浴びせかけて、大きくハンドルを切って抜き去る。早くしなければならぬ。早くアイツの下に行ってやらなければならない。行ってももう手遅れかもしれないし、間に合っても何もできないかもしれない。確実に言えることは、今佑里の下に行ってしまったら今まで積み重ねてきたものが完膚なきまでに崩れ去り、俺の今までの人生、これからの人生は全て終わってしまうということだけで、

「わかってる！！ そんなことはわかってんだよ！！」

でも、それでも行かないわけにはいかない。

アイツは、

佑里は一人ぼっちで、

俺しか今アイツを心配してやる奴はいないし、

なにより、

なにより、

なにより！！

「ホント、めんどくせえことしやがって！！」

求められたものを断ることなど、俺にできるはずがなかった。

それが俺の生き方だから……

光源が窓から差し込む月明かりだけという真っ暗な部屋に入って

まず俺が気が付いたのは、ぐちゃぐちゃに荒れ果てた部屋でもなければ、むせ返るような酒気と吐瀉物が混ざった異臭でもない。音…
…何かを打ちつけているような音だった。

ドン

ドン

ドン

暗闇の中で規則的に鈍い音が鳴り響いていた。何の音かはわからない。ただ、音と床を伝わる振動、そして気配でその音は佑里が出ているということだけはわかった。俺は声一つ物音一つ立てずに部屋の入り口まで靴のまま歩いていき、そこで壁にある部屋の電気スイッチを……点けた。

「——あ」

部屋が明るくなると同時に小さな声が聞こえた。

「お前、何してんだよ」

「せんばい……」

佑里は、

「もう一度聞く。お前は今何してるんだ？」

「わ、わたし」

昼間の格好のまま髪のをボサボサにした佑里は、

「早く答える」

「だ、だって……」

元々は可愛らしかった顔を涙と鼻水でグシャグシャにしながら、

「だって、黒木先輩が、別れよう、て、言っただもん」

包丁を逆手で握り締めて、床にばら撒いた写真をメッタ刺しにしていた。

そして、

確認するまでもなく、

散らばっている写真の全てには黒木先輩が写っていた。

「私、信じてたんですよ？ あなた……大槻先輩を除けば、唯一黒木先輩は信じられる人だったんですよ。それなのに、それなのに別れようなんてヒドイと思いませんか？」

「お前は他人に何かを強制したり束縛したりするのは嫌じゃなかったのか？」

「嫌ですよ。そんなの嫌に決まってるじゃないですか。私、今まで

ずっと色々なものを人から押し付けられてきたんです。男の子の
種な欲望とか、女の子のくだらない嫉妬とか、大人の喧しい常識と
か、子どもの無責任な羨望とか、とにかくみんな好き勝手私のこと
を想像するんです。そして、都合よく私のことを解釈して、でも実
際は全然何一つ私のことなんて見てなくて、それで、それで、それ
で私が自分の思った通りに行動すると『なあんだ、思ってたのと違
うじゃん』って思うんですよ。幻滅、幻滅するんです。私の私らし
さを見てみんな裏切られたみたいな顔をするんです。なにそれ、て
感じしませんか？ 自分で勝手に人に期待しておいて、現実を見た
らこれまた勝手に幻滅して、あまつさえそれで私のことを非難する
んですよ？ 私、関係ないじゃないですか。私のあずかり知らぬと
ころで全部決定しちゃってるじゃないですか。そういうのってすご
く理不尽でムカつくし悔しいし、なにより辛いです。だから、そん
な自家発電、オナニーみたいな思考でいつもいつも傷つけられてき
た私が、その辛さを身を以って体験した私が他の誰かに同じ苦しみ
を合わせようなんて、そんなことを考えるはずがないじゃないです
か」

「……そうか」

どうして佑里がここまで意固地になって自分を貫こうとしている
のが、今はつきりとわかった。

抗っていたのだ。

佑里は常に周りの人が持つ幻想と争っていたのだ。

誰もが自分を見ずに自分を判断していくそんな理不尽な社会に対
して、

いつも彼女は一人で戦っていたのだ。

「でも、でも、そんな誰もが私に身勝手な幻想を押し付けてくる中で、黒木先輩だけはそんなことをしなかった。そんな無粋な真似はしなかった。しっかり私を見つめてくれて、私が何かしても『佑里はしょうがないなあ』って笑ってくれて、だから、だから私はあの人を信用したんです。信頼してたんです。普段そんなことをしない私が、あなた以外の人を信じたんです。信じたのに、信じたのに、自分を曲げてまで、本当に心から寄り添える人だと思ったのに——」

ドン、と佑里は怒りに任せてまた床に落ちていた写真に包丁を突き立てた。

「『もうお前の面倒は見られない』は、あまりにもひどくないですか？」

「……」

「面倒ってなんですか？ 私は、信頼していた人に面倒を見てもらっていたんですか？ 私は私自身をしっかりと見てくれる人、対等に向かい合える人だから付き合ってたのに、あの人は私のことをペットか何かのように見ていて、それで可愛がって面倒を見ていたと言っても言えますか？ そんなの人間として対等な関係じゃないし、信用していた人からそんな風に不当に扱われるなんて、扱われてたなんて——」

やだよお……

包丁をその場に落とした佑里はまたポロポロと泣き出して頭を抱えた。

「もう、やだよお。わけわかんないよお……私、どうしたらいいかわかんない何信じたらいいのを見当もつかないよお。私、確かに他

人の目なんか気にしないし他人の意識なんて考慮しないし他人の理解なんて必要としないけど、でもやっぱり誰も傍にいないのは……寂しいよ……」

「俺は？」

「え？」

今まで自分から佑里に触れることをしなかった俺が、このとき初めて自分の意思を持って佑里に触れた。膝を抱えて泣いている佑里をギュツと抱きしめたのだ。ああ、もう少しだけこのままでいたかったけどしょうがないよな。コイツのこんな頑張りを見せられて、コイツの本音をこつもまざまざと見せつけられて、最後にポツリと寂しいと言われたら、そりゃあこれ以上俺の勝手で引き伸ばすわけにはいかないだろう。ということだ、

バイバイ、俺の今までの人生。

俺はコイツを、佑里を駄目な人間にすることに決めました。

「さつき俺を除けばって言ったじゃん。ということは、まだお前には俺がいるってことだろ？」

「……」

「違うのか？」

「……あなたが」

弱々しかったはずの佑里の体に再び力強さが戻った。そして抱きしめていた俺を振り払って、襟首を思いっきり掴んだ彼女はありったけの力を込めて叫んだ。

「なんであなたがそれを言うんだ!!」

「佑里……」

「あなたは確かに誰よりも優しい！ 誰よりも私を受け入れてくれる！ あなたと一緒にいると私はいつも穏やかな気持ちになるし、どんなことでも楽しくてしょうがない。私はあなたが、大槻先輩が好きだ、愛してる。でも、そう言うあなたは私のことを愛してくれてないじゃないか！」

「これから愛せるように努力する」

「嘘だ！！ あなたは絶対に人を愛さない！ あなたは絶対に人に好意を向けない！ 好意どころか悪意も害意も敵意も他人に抱かない！ 自分に興味がないあなたは、自分の気持ちを蔑ろにしているあなたはどうかやって自発的に他人にベクトルを向けることができない！」

「——っ、そんなことはない！！」

駄目だ。ここで佑里に言い負かされてしまったら、ここで佑里の心に負けてしまったら、俺がここに來た意味がなくなってしまう。

「私が求めればきっとあなたは応えてくれるでしょう。私があなたを呼べばこうやってヒーローのように駆けつけてくれるでしょう。でもそれだけだ！ あなたから私を求めてくれることはないし、あなたから私を呼んでくれることはない！ そして、いつの日か私より孤独な人間が、私よりおかしな人間が現れた日には、あなたは私の下から消え去ってしまうんだ！！」

「違う！ 俺は絶対にそんなことはしない！！」

きっとこれ以上言い争っても彼女は、俺のことを誰よりも知っている佑里は絶対に信じてくれない。そう感じた俺は襟首を掴んだ佑里の腕を力づくで外すと、逆に彼女をそのまま強引に押し倒してキスをした。キス。それは初めて自分からしたキスで、俺の決意を佑里に示すためにできる最後の手段だった。

「放っておけないんだ。これ以上お前がボロボロになっていくのを見てられないんだ……」

「私、だって、本当は信じたいんです……でも、あなたはこういう人だし、私もこういう人間だし、それになにより……信じきってしまっただ、黒木先輩のときのようにあなたに捨てられるのは嫌なの」「お願いだ、信じてくれ」

「口だけならなんとも言える。もっと行動で示して。私を捨てないって。ありのままの私を見つめて、そして愛してるって、行動で示してくださいよ」

俺はまた唇を重ねた。そして強く抱きしめて体を重ねて、心まで重ね合えることを願った。

時間が掛かるだろう。

もしかしたら、どれだけ時間を掛けても無理かもしれない。

でも、そんなことは関係ないんだ。

俺はこういう人間だし、

佑里はこういう人間だし、

だからきつとうまくいかないことの方が多いけれど、

それでも俺たちは共に歩いていかなければならない。

不器用な生き方をしてまでも自分を貫き通す女に、

俺は求められたのだから……

終
わ
り

……なんて、この女との物語がこうも簡単に終わるはずがなかった。

何度でも言おう。

富永佑里という女はバカでエロくてピーキーでアル中で自分勝手に加減知らずなヒステリー女なのだ。

「お、まえ」

お腹に渦巻く違和感。

広がる痛み。

急に胸の奥深くから何か込み上げてくる感覚に襲われたと思ったら、

俺は佑里の顔に血を吐いて、

彼女の上から転げ落ちた。

「先輩」

落ちていた包丁をいつの間にか再び握り直していた佑里は、俺の返り血を浴びた凄惨な格好のままその場に立ち上がった。

「こんなことをする私でも、あなたは私を愛してくれますか？」

「う、ごほっ、お、まえ、やっぱり……ばか、だ、ろ」

やりやがった。

コイツ、ついにやりやがった。

いつかやるんじゃないかと薄々思っていたけれど、いつか俺はコイツに殺されるんじゃないかといつも冗談めかして言っていたけれど、

刺しやがった!!

容赦なく、加減なく、躊躇いなく、寝ながらの体勢で俺の右脇腹を刺しやがった。

それも一番最悪なこのタイミングで。

「私はこういう女なんです。『信じてくれ』と言ったり、キスをされたくらいじゃ足りないんです。私はもう誰かに捨てられるようなことはされたくない。もう一度そんなことがあったら私、死んじゃうんです。だからこんなことをされても、私に殺されたとしても私のことを一筋も疑わず、愛し続けてくれる人じゃなきゃ駄目なんです。では、先輩聞きますけど、あなたはそういう人ですか？」

なるほど。行動で示してくださいとはそういうことだったのか。口ではなんとも言えるとはいえ、まさか愛しているとまで言った人間にそんなことをするとは、ただけぶっ飛んでるんだよ、この女は。それに何が『他人に何かを強制したり束縛したりするのは嫌』だ。お前は、俺にただけとんでもないものを強制してるんだよ。

世間の束縛が激しい女なんて目じゃねえよ。

刺された部分を手で押さえながら冷静に傷の深さを探ってみる。刺されたときそれほど強い違和感があったわけじゃないから、刃は思っている以上に深くは刺さらなかったのかもしれない。しかし、押さえた手の隙間からは生温かい血がどんどん流れていき、このまま放っておけば冗談抜きに死んでしまっただろう。

ああ、やっぱり俺はどこかで選択肢を間違えたのかもしれない。佑里の部屋に来てしまったこと、佑里とお酒を飲んでしまったこと、沙織ちゃんと別れてしまったこと、こんな生き方を選んでしまったこと。今となつてはどれが間違いで、あるいは全部間違っていたのかもしれないが、まあ過ぎてしまったことは仕方がない。というか、結局俺の人生はこんなくたらない人生だったのだろう。なんかここまで来ると、もう、色々諦めがついた。

大槻亘。

バッドエンドフラグを取ってしまいました。

「せんぱーい、生きてますか？」

「……」

「……まあ、いいや。別に私もそこまで望んでたわけじゃないですから」

虚ろな目で倒れている俺の前に屈んだ佑里は、包丁を持っていない右手でいとおしいそくに俺の頭や頬を撫でた。そして、

「安心してください。私も一緒に死にますから」

は？

「最初からそのつもりだったんですよ。先輩にメールをした時点でそうしようかなって考えてたんです。私のメールで先輩がこの部屋に来てくれたら一緒に死んで、来てくれなかったら寂しく一人で死ぬ。私としてはどっちでも良かったんですけど……いえ、やっぱり死ぬんだったら先輩と一緒に死にたいと思ってましたから、そういう意味で言えばあなたはどこまでも私の期待に応えてくれる人でした」

——ただ、その力が……あなたのように誰かの幻想を叶えてあげる力が、私にほんの一欠片でもあれば、また未来は変わっていたのかもしれないね。

涙を流しながらそう呟いた佑里は、

左手の包丁で自分の胸を突き、

突き……突き刺せなかった。

なぜなら、

この俺が、

この俺の目の前でそんなことをさせるはずがないだろ！！

「ふ、ざ、けるな……」

傷口から手を離し、佑里の左手首を握り締めた俺は震える声で俺の決意を示すことにした。

「死にたければ、勝手に死ね。俺を巻き込む、な。そして、お前は、そういう女だったんじゃないのか？」

「え……」

「勘違い、してる、かもしれないが、俺だって……誰でもいいわけじゃないんだ。懂れていたお前だから、他人の目を気にせず他人の意識を考慮せず他人の理解を必要としない、ただ自分らしく自分の為に生きていける佑里だからこそ、俺は命をかけてきたんだ。こんな風に他人に振り回されている、たった一人のクソみたいな男に付られた程度で喚くお前など、俺が命を、かける意味など、ありはしない」

「……」

「そして、だ。今、お前がここで死んでみる。そうしたら、俺は絶対に他の奴らを許さない。お前をここまで苦しめてきた奴らを絶対に生かしてはおかない。俺は絶対にこの場を生き抜いて、あの高慢ちきな黒木も、あの勘違いも甚だしい沙織も、お前に淫らな欲望を向けたサークルの屑どもも、全部、全部殺してやる！！ 全部だ！ いいか！ よく聞けよ、お前の為に殺すんだ！ お前は簡単に死ぬって言うけどな、お前が死ぬということが俺にとってどれだけでかい意味があるのかも少し考えろや！！」

最後の力を振り絞って佑里の手から包丁をもぎ取り、それを手の届かない台所の方に投げ捨てる。そして、残り少ない力で右手を握り締め、今までの不満を一気に晴らすように佑里の顔を殴ってやつ

た。やっぱり、こういうわがままな女は一度殴ってやらないと駄目なのだ。

「痛い……いたくないけど……痛い……」

「あ、たりまえだ。これが、俺の、愛……だから、な」

全ての力を振り絞った俺は佑里の体にしなだれるように倒れた。やばい、ホント、もう、死ぬかもしれない。血が足りなくて、視界がぼやけて、頭がクラクラする。しかし、何度も味わったことがあるけど、コイツの体は本当にものすごく柔らかいな。

「救急車を、呼んでくれ……」

「わがままで……ごめんなさい……」

「べつに、いいよ、慣れてる、し」

「ホント、ごめんなさい……」

「もしも、俺が、このまま死んだら、命日には芋焼酎を持って墓参りを、してくれ」

「わかりました……お墓の前であなたの為にゲロ吐くまで飲み続けます」

「た、のむよ。それと、もう一つ。もしも、俺が助かることができたら——」

——結婚、しようか。

それを最後に俺はゆっくりと目を閉じた。

助かることを三割、

死ぬことを七割、

願いながら……

でも、

結局どちらにしても面倒くさいことには変わりそうにないな。

エピソード（後書き）

ぐだぐだですが、これで終わりです。お酒は飲んでもいいですが、飲まれることのないようにしましょう（笑）

改行がやけに多いこの作品を呼んでくださった方、特に携帯の方々は本当にありがとうございます。感想等ありましたら、いつでもよろしいのでぜひ気軽にどうぞ。

では、機会がありましたら次回作でまた会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2053r/>

「明日の午前十時に一升瓶持って正門に集合お願いします！」というメールを

2011年6月4日09時45分発行